信じて

消月

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
タイタンフォールとドルフロ　のクロス物です。信じて（小声）

目次

調整 ―― 1
次元を超えて ―― 4
前触れ ―― 10
降下 ―― 17
調査 ―― 24
ＡＲ―１５ ―― 28
これから ―― 34

調整

ミリシア第８艦隊の旗艦、ドラコニス艦内に存在するタイタンハンガーブロックにて、自らに受け渡された新型ヴァンガード級タイタンのシステムチェックを進めていく。

新たにミリシアが開発したヴァンガード級の強化発展型であるこの機体は、既存のヴァンガード級に搭載された、機体を覆うエネルギーシールドを再展開可能なオートシールドリチャージ技術や、様々な状況下に対応することができるよう、全てのタイタン兵器、及びタイタンコアを機体の専用スロットに格納し、その場で状況に合わせて換装できるヴァンガードシステム、そして非常に高度な、それこそ歴戦のタイタンパイロットと経験を積めば、自我を獲得し得る程の学習ＡＩを標準装備として採用。更に大型粒子兵器の直撃にも耐え得る装甲と、軽量級タイタンに引けを取らない機動性を持ち合わせている。流石に全てのタイタンの武装を扱えるようにしたのはやりすぎたようで、生産性は最悪の一言。通常タイタン８機分ものコストが掛かるため、量より質を取るミリシアＳＲＳにのみ配備されている。ここまでならば通常のヴァンガードと大差ない。この機体は更に武装の規格を全面的に見直し、より重装甲化及び飛行型タイタンが使用するフライトユニットの運用を可能にしたハイエンドモデルとして開発された。

この機体1機でヴァンガード級が5機生産できると聞いた時は目を剥いたが。ＳＲＳでも、一部のエースパイロットにしか配備されていない機体であり、それが自らに与えられたということは上層部も私の実力を認めてくれているということだろうか。

「……シールドリチャージ異常なし、動作正常。ヴァンガードシステムオールグリーン……。フライトユニットも問題ないな。ＭＢ！　新しいシャーシの調子はどうだ？」

大まかな機体の調整を終え、私がかつて搭乗していたヴァンガード級に搭載されていたＡＩであるＭＢ―４２７４に現在の様子を訪ねた。

『三万五千パーツ満足です。ミラン、調整ありがとうございます』

相棒が私の名前を呼び返礼する。どうやらデータコアの移植も無事に終了した様だ。新しい身体を気に入ったようでご満悦である。

「それは良かった。……ふぁぁ。そろそろ寝ようか」

徹夜で調整を行なっていたためか、思わず欠伸が漏れる。時刻は午前一時を示していた。現在ミリシア第８艦隊は、かつて惑星タイフォンが存在した宙域を巡航中だ。この調子で進めば今日の昼頃には無事にミリシア本部のある惑星ハーモニーへと到着するだろう。

「ＭＢ、私はそろそろ自室に戻るよ。何かあったらまた連絡をくれ」

『はい、夜遅くまでありがとうございました。ミラン、おやすみなさい』

『ああ、おやすみ。ＭＢ』

相棒に自室に戻るように告げ、無数のタイタンが整然と並ぶタイタンハンガーを後にする。目の下に出来た隈を擦りながら自室を目指した。

次元を超えて

タイタンハンガーを後にして自らの自室を目指す。

私が現在乗艦している、ミリシア第８艦隊の旗艦を務め、母艦でもある戦艦ドラコニスは非常に大きな船で、全長３ｋｍを誇る巨大な艦船だ。

現在収容されている人数は七千人ほど。その外観は名前の通り龍を彷彿とさせ、見るものを威圧し、畏怖を感じさせる。

船体には対空エネルギー機関砲や対艦用レーザーキャノン、１０５ｃｍ六連装粒子砲、艦首に備わる高出力波動砲といった強力な兵器と、タイタンとは比べ物にならない、船体を覆うほどの強大なエネルギーシールドを保有している。

元はＩＭＣが建造、所有する亜空間次元跳躍を可能とする超弩級戦艦であったが、先日のブロードソード作戦においてどさくさに紛れ、ミリシア側が航空基地襲撃時に鹵獲、改修を行い現在運用している。

艦内には自前の生産プラントや１５０機近いタイタンを格納可能なタイタンハンガー、航空機保管庫や医療用肉体再生装置、射出レールカタパルトなどを搭載しており、

生産プラントは資源があれば食料から軍需品に医療雑貨、果てはタイタンパーツと幅広い分野の物資を生産可能な規模だ。

航空機保管庫には様々な用途の航空機が所狭しと並んでいる。

再生装置は怪我や肉体の欠損、及び死亡したパイロットや一般兵の肉体を文字通り再生、蘇生させる。

そしてタイタンや航空機を電磁力で加速させ、高速で発艦させることが可能な出撃用レールカタパルトなど多岐にわたる分野の施設が存在する。この船は旗艦とよぶに相応しい機能を持っていた。

広大な艦内の通路を歩きながら自らに与えられた部屋に足を進める。艦内は多目的自律型作業ロボットであるマーヴィンたちが定期的に清掃しており常に清潔な状態に保たれていた。

「だだっ広いのも考えものだな。窮屈よりかは広い方がいいが……」

思わずひとりごちる。自室は居住区画に存在しており、タイタンハンガーからはかなりの距離がある。

船が巨大であるため、それに比例して船内もまた広い。

移動用のエレベーターなどを利用しないとかなりの時間を喰うだろう。通路を右に曲がりエレベーターのあるフロアへたどり着く。

そこからエレベーターを呼び出して、居住区がある階層を選択しエレベーターを発進させた。

ドラコニスのメインデッキにて本艦の艦長であり、第８艦隊の司令官でもある彼、エリ・アンダーソン大佐は指揮を執っていた。

元々はＳＲＳのタイタンパイロットでしかなかった彼だが、類稀なる指揮の才能と統率力、そして戦場で培われた高い判断能力と実戦経験を買われ現在の地位に就いた叩き上げのエリートだ。

身に纏う雰囲気と使い込まれた灰色のパイロットスーツ、隙のない立ち振る舞い、そして右頬についた大きな切り傷が彼が歴戦の猛者であることを証明していた。

現在、彼の率いる艦隊は作戦行動を終えて、ミリシアの本拠地である惑星、ハーモニーへと帰路をとっていた。

「現在、タイフォン周辺宙域を通過中。全艦、観測センサの出力を最大に引きあげろ。フォールドウェポンによる宙域内の次元断層に巻き込まれると異次元に引き込まれるぞ」

艦隊に指示を出し、最大限に注意を払う。

彼が心配している次元断層と呼ばれる現象は、かつて惑星タイフォンに存在した対惑星兵器フォールドウェポンが引き起こしたものだ。

フォールドウェポンはＩＭＣがタイフォンに存在した異星文明の遺跡を調査した際に発掘、修復されたものであり、それを惑星ハーモニーに向けて撃ち込むつもりだった。

しかし、事前に情報を掴んでいたミリシアがタイフォンにミリシア第７艦隊を派遣、１機のヴァンガード級タイタンと１人のパイロットの活躍によって破壊された。

その際、惑星を吹き飛ばすほどのエネルギーがタイフォン内部で暴発し、タイフォンは跡形もなく消滅してしまったが。そのエネルギーの残滓が現在タイフォンが存在した宙域にて残留し、次元の裂け目を生み出している次元断層だ。

これに呑み込まれたら最後、脱出は不可能で、一生異次元を彷徨うこととなる。

メインデッキ内に緊張が走る。

最悪の場合、異次元で一生を過ごすこととなるのだ。

クルー全員が神経を研ぎ澄ませ気を張り巡らし計器に異常がないか逐一チェックする。

ミリシア第８艦隊全艦は亜空間跳躍、ＳＦ作品で言うところのジャンプと呼ばれる機能を備えており、長距離を瞬時に移動出来る。

本艦ドラコニスはその能力が最も高い艦船だが、一度次元断層に捕まれば流石の本艦

でも脱出は難しい。
過去にはＩＭＣ艦隊が引き込まれて艦隊が全て消滅したデータも存在する。
彼らの二の舞にならぬ様に慎重に宙域を進んでいく。
そして艦隊が宙域を抜けようとした正にその時だった。
観測計器が異常を知らせたのは。
「……ッ！　次元断層を確認！　これは……！　今まで観測されたことのない規模です！　発生源は本艦直上、距離一万二千！」
観測していた１人のオペレーターが状況を報告する。
しかもその規模は今まで観測されたものを遥かに上回るものだった。
おまけに本艦の直上に発生したという最悪なおまけつきだ。
「全艦ジャンプの用意を！　現宙域を最高速力で離脱せよ！」
咄嗟に指示を出し、艦隊を離脱させる様に告げる。
なりふり構ってはいられない。
悠長にしていたらあっという吸い込まれ、一生を次元の狭間で終えることとなるだろう。
彼の指示に従い味方艦船が次々と宙域を離脱していく。
本艦もそれに続く様にジャンプを行おうとしたその時だった。次元断層が突如とし

て勢いを増したのだ。
まるで本艦を逃がさないと言わんばかりに。
ドラコニスは拡大を続ける次元断層に呑み込まれつつあった。
「更に勢いを増しています！　こんなのって……！」
状況報告を行うオペレーターの声に悲壮の色が指し、不安がメインデッキ全体に伝播する。それを叩き潰すかの様にアンダーソンは声を張り上げる。
「諦めるな！　出力を最大に、直ちにジャンプしろ！　こんなところでお前たちを死なせるわけにはいかない！」
多くの人命を預かる立場から今出来る最善の行動を取るべく部下に命令を出す。まだ、完全に呑み込まれたわけではないのだ。絶対に諦めてたまるものか。
彼の声に正気を取り戻したクルーたちが、危機を脱するべくドラコニスのジャンプを実行する。呑み込まれつつある状況で何が起こるかは判らないが、何もしないよりは遥かにマシだろう。ドラコニスが次元断層から逃れるべくジャンプを実行、それと同時に船体を覆う様に極光が発生しドラコニスを包み込んだ。

前触れ

『緊急ジャンプシークエンスを実行します。搭乗員は速やかに指定避難ブロックなど安全な場所に退避してください。繰り返します……』

艦内が突如として大きく揺れ、直後に何の前触れも無くスピーカーから警告アナウンスが流れ出す。それに伴い乗っていたエレベーターが安全のために一時停止し蛍光灯が消え、非常灯に切り替わる。ミラン自身もまた揺れにより尻餅をついた。

「……緊急ジャンプだと?」

本来は通常運行によりハーモニーへ帰還する手筈となっていたのだ。

それがいきなり予定を変更してジャンプを実行するというのだ。

『何か異常があったのでしょう。現在ドラコニス艦内の一部施設に障害が発生しています、貴方が乗っているエレベーターもその一つです』

思わず口に出たその疑問に聞き耳を立てていたのか、ＭＢが通信機から返答する。

「聞いてたのか……。それに異常事態?　一体なにが」

考えられたのはそこまでだった。

先程の揺れより更に強い衝撃が艦内を襲ったのだ。その影響かエレベーターが完全

に機能を停止し非常灯もまた消えてしまった。
「……考えている場合じゃなさそうだな」
『その様ですね。ミラン、エレベーターから脱出出来そうですか？』
「またさっきの様な揺れがなければなんとか」
『分かりました。お気をつけて』
とにかくまずはエレベーターから脱出しなければならないだろう。
ＭＢとの通信を済ませて、フラッシュライトをつけ、暗闇に包まれたエレベーター内部を照らし出す。天井の緊急ハッチを開けてエレベーターから抜け出し、腰部に取り付けられたパイロットの標準装備である小型ジェットパックを噴射し壁に取り付き、三角飛びの要領で反対の壁に飛び移り上層の自動ドアがある階層へと登っていく。ジェットパックはリラックススタビリティと呼ばれる姿勢制御技術を用いており、文字通り体の動きに合わせてジェットパックが作用してくれる。これにより壁を高速で走る事が出来るウォールランや瞬時に高所に登る事が出来る三角飛びや一時的なホバリング、二段ジャンプに高所から無傷で落下出来る耐久性を備えたあらゆる状況に対応出来る装備となっている。この様な状況だと特にその効果を発揮してくれる。
「……しばらくは寝れそうにないな」
思わずぼやいたその呟きは誰にも聞こえることはなかった。

銃声と爆発音が響き渡る。

鉄血の主権領域であるＳ―２１地区の市街地跡にて現在、民間ＰＭＣであるグリフィンと本領域を支配している鉄血との熾烈な戦闘が繰り広げられている。

グリフィンの戦術人形部隊は鉄血に奪われたＳ―２１地区の奪還を目的として派遣された。

「あと少しだ、このまま押し切るぞ！」

現在グリフィン側が鉄血人形を率いるハイエンドモデルを撃破したことによって優位に立っている。鉄血の戦術人形は高度な人工知能を搭載した一体の最高級戦術人形であるハイエンドモデルを指揮官とし、その他量産機を統率するといったコンセプトを取っている。ハイエンドモデルによる指揮が量産機たちのパフォーマンスを最大限に引き出しており、この状態の鉄血は非常に厄介だ。しかし鉄血の量産機は簡易的な人工知能しか備えていないため、一度指揮官を失えば彼女たちは烏合の集と成り果てる。指揮官を失った彼女たちはグリフィンの戦術人形部隊により殲滅されつつあった。

「ハイエンドモデルは厄介だったけど後は雑魚だけ！　ラクショーラクショー！」
「スコーピオン！　お喋りは後、目の前の鉄血に集中しなさい！」
「そんな怒んなくてもいいじゃん！　鉄血も後少しだけだし、イングラムもそう思うでしょ？」
「そうですね。ＷＡは気を張り詰めすぎです。少しリラックスしてみては？」
「アンタたちは気を抜きすぎよ……。全く」
　戦闘中だというのに呑気なものだと思わず呆れてしまうが、この二人には何を言っても無駄だろう。意識を切り替えて自らの名を冠する狙撃銃であるＷＡ２０００を構えて取り付けられた倍率サイトを覗き、クロスヘアに敵を納めて、発砲。残った鉄血を漏れの無いように丁寧に始末する。この区間の掃討も後少しといったところだろう。
「ベクター！　こっちは終わったわ。そっちはどう？」
『燃えろ……全て燃やし尽くしてやる！　灰も残さない……！』
「……ベクター？」
　通信を繋ぎ別の区画で作戦を行っている友軍に連絡を入れ進捗を尋ねたところ、何やら不穏な言葉が飛んできた。
『すいません、ＷＡさん。今ベクターさんはお取り込み中なので代わりに私が。現在此方も残存する鉄血を撃破しつつあります。この調子でいけば五分と経たずに終了する

見込みです』

　無線機からベクターに代わりにＭＰ５が報告を入れてくる。

「……まともなのはアンタとスプリングフィールドとＭ５９０ぐらいね」

　ため息混じりに報告を聞いて思わず呟く。

『あはは……。皆さん個性的ですけどとてもいい方たちですよ?』

「個性が強すぎるのよ……」

　眉間を手で抑え再びため息を吐く。彼女たちの実力は確かなものだ。そこは認めている。……もう少し我を抑えてくれるとありがたいのだけど。

『まあ、しかたありませんよ。それに私は今の環境結構気に入っていますし』

「アンタも物好きね」

　当たり障りのない会話を続けているとスプリングフィールドから連絡が入った。

『わーちゃん、グリフィンから追加の指令が入ったのだけれど……』

「わーちゃんて呼ばないでって言ってるでしょ!」

『別にいいじゃないですか、わーちゃん。それで、スプリングフィールドさん。追加の指令とは何ですか?』

「そうだよー。わーちゃん」

「弄り易いのがわーちゃんのいいとこなんですから」

「だからわーちゃん言うな！」

先ほどの通信を盗み聞きしてたのかイングラムとスコーピオンが面白いおもちゃを見つけたといわんばかりにＷＡ２０００を弄り倒す。憤慨しているＷＡ２０００を弄り続ける部隊員に部隊長であるＭ５９０が通信で宥めてスプリングフィールドに続きを促した。

『わーちゃん弄りはそこまでに。流石にわーちゃんが可哀想です。それで、スプリングフィールドさん。追加の指令とは？』

「結局アンタも言ってるじゃない！」

『まあまあ、わーちゃんもそこまでに。……追加の指令は鉄血の掃討後、Ｓ―２１地区の指定座標地点にて観測された大型物体の調査、だそうです』

……妙なことになったとドラコニスのメインデッキにてアンダーソンは嘆息する。

次元断層から逃れるために緊急ジャンプを指示して無事に断層から脱することができた。ここまでは良かったのだ。……ここまでは。

「……２０００年代の地球、か。俄かに信じがたい話だ」

彼が現在頭を悩ませているのは自らが置かれた状況と現在位置だ。

宇宙空間から亜空間転移を果たした本艦が到着したのは惑星ハーモニーではなく太陽系第三惑星、地球。全ての人間の故郷である星だ。

惑星ハーモニーが存在するフロンティア星系は太陽系から何百光年も離れおり、ドラコニスといえど一回のジャンプで地球圏に到達することは到底不可能だ。それに加えてＩＭＣや他国が配備した衛星兵器や護衛艦隊が存在しない点や星図表が我々のいた地球と若干の異なりを見せ、終いにはＩＭＣ謹製の惑星測量装置を起動し測量を行った結果、２０００年代の地球とほぼ全て一致するとのデータを算出した。信じられないが、ここは確かに地球なのだ。それも我々がいた時代の数世紀前の。それに加えて先ほどのジャンプでドラコニスの燃料もかなり消費してしまった。残りの燃料も持って後三日といったところだろう。

「……はぁ。指揮官なんてやるもんじゃないな」

ため息を吐き、今後の方針を決定し、行動を起こすべく先ずは一部のパイロットや士官クラスの人物に召集をかけた。

降下

『ミラン、作戦開始三十分前です。準備はどうですか？』

「待ってくれ、今装備の確認中だ」

急かしてくる相棒に短く返し、自らの自室にある予備ロードアウトが収まっているガンロッカーにカードキーを通してロックを解除すると中に収まっていたパイロットスーツを着用し灰色の複合強化プラスチックで覆われ、フルカスタマイズされた自動小銃と予備の４０連マガジンを十五本ほど引っ張り出しスーツのマガジンポケットに挿入。

入り切らなかった分はバックパックとサイドバックに放り込む。

次いでスーツの腰回りに取り付けられたグレネードポーチに十枚ほど銀色に輝く二種類の手裏剣を捻じ込み、余ったスペースに手榴弾を三つ押し込み、レッグホルスターには黒光りする少々大きな回転拳銃といくつかのシリンダを差し込んだ。

「……それにしても私たちの世界と異なる過去の地球か。それに加え第三次世界大戦による核使用による土壌汚染にＡＩの反乱、おまけに見たこともない怪物ときたもんだ。まるでできの悪いＢ級映画だな」

装備のチェック中、ふと先ほど召集を受けた時のことを思いだした。

「過去の地球……ですか？」

ドラコニスの会議室に集められた面々がアンダーソンから伝えられた現在の状況に思わず狼狽する。この場に集められた一部のＳＲＳパイロットたちと士官以上の階級を持つ部隊長や技術者は皆優秀な人員を多数保有する本艦でもアンダーソンが選出した選りすぐりのエリートだ。そんな彼らでも流石にすぐ飲み込める状況ではなかったが。エレベーターから脱出した直後にミランもまた呼び出された。

「……ああ、それもどうやら俺たちが居た世界の物と異なるな。その証拠に先ほど先遣隊として送り込んだクーパーが率いる飛行型タイタン部隊から情報が送られてきた」

既に調査隊を送り込んでいたことに驚いたがそれを気にすることもなくアンダーソンは淡々と話をすすめていく。

そう告げると会議室の中央に存在する大型デスクに備わるホログラムを起動し、映像を投射させる。そこに映し出された映像はさらに彼らの困惑を深めるものになった。

雑多な銃火器で武装した少女たちとそれとは反対に紫と黒の戦闘服で統一された光

学兵器で武装した集団との戦闘を映したものや荒廃した都市と大地、そしてタイタンに匹敵しうる大きさの未知の怪物たちと壮絶な生存戦争を繰り広げる見たこともない兵器を扱う軍隊の映像だった。

「……あー、訳がわからんだろうからまずさっきの映像について1つずつ説明する。先ほどの映像で、最初に出てきた少女たちはこの世界で戦術人形と呼ばれるアンドロイドだ。……驚くことに人間の女性に瓜二つだが、彼女たちはロボットだ。そして彼女たちが戦ってた相手は鉄血工造と呼ばれる会社が作り出した戦術人形のようだ」

「……同じ戦術人形同士が争うんですか?」

パイロットの一人が質問する。

「いや、どうやら事情があるようでな。紫色の方はなんらかの事故で統率ＡＩが暴走し鉄血全ての戦術人形を支配下に置いて鉄血本社の社屋にいる従業員を一人残らず皆殺しにした後、この世界の人類に牙を向いているようだ。そして2つ目は見たことのない装備を扱う軍隊がこちらもまた見たことのない化け物共を相手にしていた映像だが、これについては今のところ詳しい情報が得れていない。ある程度は集められてはいるが正確性に欠ける、より詳しく調査する必要があるだろう。詳細が分かり次第通達する」

会議室のドリンクサーバーからコーヒーを汲み口を付け、一拍置いてアンダーソンが再び話し始める。

「そして3つ目だか、ここからが本題だ」
　声のトーンを一段落としてアンダーソンが重苦しく口を開く。普段冷静沈着な作戦コーディネーターである彼の声からは珍しく焦燥が感じ取れた。
「……第三次世界大戦が、この世界の地球では起こったようだ。我々の世界の地球の歴史では世界大戦など起こっていない。どうやら領土や食料を巡って核兵器をふんだんに使って互いを攻撃し合い、航空、及び海上戦力を使い果たし、最後は泥沼の地上戦を行ったようだ。その後国家は大きく疲弊し、統治能力の大半を失った。現在は重要都市などの拠点を除きかつて自らの領土だった土地をオークション形式で売りに出し、ＰＭＣなどの民間企業が統治している有様だ。……ここまで説明すれば後は分かるな？存在しない兵器や化け物に世界大戦、戦術人形などこの時代において俺たちの地球の歴史と大きく食い違っている。以上の事から我々の地球とは大きく違った歴史を辿る謂わば平行世界の地球に我々は辿り着いてしまった……様だ」
　アンダーソンの口から告げられた現在の状況にこの場の誰一人としてついていけなかった。ミランもまた何を馬鹿なと思ったが、アンダーソンはつまらない嘘をつく男ではないのはこの場にいる全員が理解している。
「つまり私たちは次元断層からの脱出後、不慮の事故で並行世界の、それも過去の地球に来てしまったと？」

「簡単に言うとそうなるな。それに加えて帰還の目処は立ってなく、おまけに先ほどの転移で燃料も心もとない現状だ。技術開発班が現在帰還方法について必死で調べているが当分は帰れないだろう。燃料については既にどの国やＰＭＣにも属さない領域に採掘ポイントの存在を確認できた為後に採掘用の部隊を派遣する予定だ」

未だに納得できないが一旦は情報を呑み込みそれらを念頭に入れる。
それからは現地勢力との衝突する可能性や対応、採掘の為の降下部隊の行動方針を綿密に話し合い、いらぬ混乱を避ける為この情報は後日他の船員に伝えられることとなった。

右腕に取り付けられたグラップリングアンカーと太腿に着用するナイフホルダーに収まっているクナイ状のパルスブレード、そしてスーツ本体に内蔵された光学迷彩がしっかりと動作する事を確認し、自らのタイタンが待つハンガーに足を踏み入れる。
「……まさか新型の初運用がこんな形になるとはな」
改めて自らに割り当てられたタイタンを眺めてみる。全長１０ｍほどの灰色をメイ

ンカラーとして塗装された複合装甲を纏った人型の機動兵器がメインカメラである翡翠色のデータコアをこちらに向け一瞥する。
『仕方ありません。先ずは採掘任務を無事に完了することを念頭に動きましょう』
　ＭＢがコックピットハッチを展開し返答する。
　コックピットに飛び乗りハッチを閉めてタイタンフォールシークエンスの準備に取り掛かる。……パイロットである自分が呼び出された時点で何かしら任務に就くとは思っていたがその任務地が並行世界の地球だと誰が想像しただろうか。
『もし現地の勢力と遭遇した場合、こちらから絶対に攻撃行動を起こしてはいけませんよ』

「……分かってるさ。相手がこちらに攻撃してきた場合は警告を入れ、それでも敵対するなら穏当に無力化する、回線などで連絡を入れてきた場合はこれにある程度応答し最低限の必要な受け答えをする、その際下手な受け答えはしない。だろう？」
『はい、その通りです。アンダーソン大佐は必要が有れば武装の使用を許可しています』
　ＭＢと作戦開始五分前に作戦内容の再確認を行っていると友人である偵察任務を終えて帰投したクーパーが小隊回線を開き通信を入れてきた。
『そっちは準備できたか？』

「ああ、問題ない」
『それは良かった。……偵察任務後に採掘任務を押し付けてきたアンダーソンには後で文句を言わないとな』
偵察任務遂行後、彼もまた採掘任務に捻じ込まれたようだ。ご愁傷様である。
『降下後周囲の安全を確保し採掘用ハーベスターを設置後、採掘終了まで防衛を行なってください。この際現地勢力に攻撃された場合武装の使用許可が下りています』
相棒が任務の最終確認をする。それに頷くとタイタンフォールシークエンスを実行に移す。それに伴いハンガーにアナウンスが流れた。
『タイタンフォールシークエンス開始三十秒前、ハッチ展開に伴い適正タイタンパイロットを除く人員はハンガーから速やかに退去してください。繰り返します……』
聞き慣れた警告アナウンスを聞き流しているとタイタンが接続されたハンガーユニットの足場が開放される。
『カウントダウン開始、5．4．3．2．1タイタンフォールスタンバイ』
アナウンスが終了すると同時にユニットの接続部が切り離され、重力に従い降下地点に向け二機のタイタンが落下を開始した。

調査

Ｍ４は無事に逃げれただろうか。
ＡＲ―１５は一人廃墟の一室に隠れ仲間たちを思う。
鉄血の主権領域に潜入しデータの回収には成功したのだ。……その後待ち伏せてた代理人が率いるハイエンドモデル部隊に追われる羽目になったが。
今現在も鉄血の追跡部隊が総力を挙げて私たちを追っているだろう。
それに加えて先ほどまで銃声が辺りに響き渡っていた。今現在は収まったが用心しとくべきだ。

プランＢを実行し、ＡＲ小隊各員がそれぞれ散開、鉄血部隊の注意を引き分散させ、そのうちにＭ４が現在グリフィンに救援を求めに行っている。
優柔不断でおどおどしてはいるがＭ４はあれでも優秀だ。
きっとやり遂げてくれるだろう。そう考えたその時だった。
直後、近くで足音が響いた。
思考に耽りすぎて周囲の警戒を疎かにしてしまった。

普段なら絶対にしないミスを自戒し意識をただちに切り替え残弾の少ない自らの名称にして、半身でもある自動小銃のセーフティを解除し戦闘態勢をとる。

足音は迷いなくＡＲ―１５が居る部屋に向かってくる。ドアに向け自動小銃を構えて待ち構える。その後足音が止みドアを三回ノックする音が響いた。

「誰か居るのか？」

周囲は鉄血人形の残骸でまさに死屍累々といった有様だった。この惨状を生み出した一人と一機は現在燃料採掘用ハーベスターの設置を済ませて採掘作業が完了するまで防衛を行なっている。

「……まさか降下後にいきなり襲われるとはな。ここはどこの勢力にも属してないんじゃなかったのか？」

ミランはタイタンのコックピット内で思わずため息を吐いた。

本来ならば誰もいない筈の採掘ポイントに降下したらいきなり鉄血の戦術人形が現

れ、襲い掛かってきた。
　……後でアンダーソンに文句の一つでも言ってやろうと心に決め周囲に動体反応がないかセンサーを起動させ精査する。
『どうやら鉄血はかなり広域を支配している様ですね。それに加えてこの世界にはタイタンフォールの反応を検知する技術はまだない筈です。偶然発見されたのでしょう』
『彼女たちは非常に好戦的な様です。警告にも応じなかったため今後発見次第撃退することを推奨します』
「そうするさ。いきなり撃たれたら困るからな」
　相棒の提案に賛同し再びセンサーを確認する。隣接する廃墟郡の一つである商店の中に僅かな揺れを検知した。
『ミラン、動体反応を検知しました。ＨＵＤにマークします。タイタンから降りて調査を』
「……私が調査するのか？　それに物が倒れただけかもしれないぞ？」
『はい。ハーベスターの安全を第一に動くべきです。どの様な些細なことでも不穏分子は排除すべきです。それに私のシャーシはドアを潜れませんから』
「トラッカーキャノンで吹き飛ばすのはどうだ？」
『ダメです』

「……運がいいな」
『皮肉を検知』
皮肉を検知するほど無駄に高性能で、融通が効かない愛機とバカみたいなやりとりを終えてタイタンから降機し観測地点の揺れを調査すべく目標の建物へと足を進める。
背にした自動小銃の折りたたみ式ストックを展開し、安全装置を外していつでも撃てるように準備する。
「ＭＢ、ハーベスターを頼むぞ」
『了解、お気をつけて』
何事もないように祈りながらＭＢと別れた。

ＡＲ―１５

目的の建物へと足を踏み入れる。

かつては食料品店であったそこは荒れ果て、見るも無残な有様となっていた。陳列棚には略奪されたのか殆ど物品が残っておらず、レジは破壊され、更には地面や壁には多量の血痕がこびりついていた。

「……酷いな」

店内の惨状を見て思わず呟く。

世界大戦による食料危機の不安から恐慌状態に陥った人々が暴徒と化し、略奪を行ったのだろうか。もしかしたら辺りの店も同じ様な状態なのかもしれない。

それに加えて周囲にたまった埃の量が多い。かなり長い間放置されていた様だ。

少々薄暗い店内を自動小銃に取り付けられたフラッシュライトを点灯させ、照らし出しそれと同時に太腿のナイフホルダーにセットしたクナイ状のパルスブレードを引き抜き、店内の壁に突き立てた。

パルスブレードはその名称の通り、グリップ内部に感圧式パルスソナーを備えており、パルスブレードの着弾地点半径３０ｍ以内の動体反応及び生体反応を検知し、地形

データを精密に取得可能な軍需品だ。これによりクリアリングも容易になる。ブレード自体の切れ味も良好でそのまま投げナイフとして運用するといった扱い方も可能で、パイロットが扱えば白兵戦闘もこなすことができるだろう。

パルスブレードが壁を基点とし周囲に可視化されたソナーを発生させる。ソナーは店内に反響し、身につけているヘルメットに取得した情報が伝達される。

「二階から人間大の反応……?」

取得した情報を確認すると、そこには二階の一室におよそ人間ほどの大きさの何かが引っかかっていた。

「……生体反応がないだと?」

ミランは思わず怪訝そうになる。

ソナーが検知したこの人間の様なものからは、一切生体反応を検知できなかったのだ。

先ほどMBが撃破した鉄血の戦術人形群も生体反応がなかったことから、もしかすると戦術人形に類するものかもしれない。

反応があった二階へと続く狭い階段を見つけ、パルスブレードを仕舞い登って行く。

床が腐食しており一歩、また一歩と進むたびに床が軋み派手に音を立てる。おそらく二階にいるであろう戦術人形? に気づかれただろう。

まあ、確認に来たのだからわざわざ足音を消して忍び寄る必要はないので問題はないが。

目標の人物がいる部屋のドアの前に辿り着く。

いきなり入って撃たれる危険を避けるため、ドアをノックし中にいる誰かに呼びかけた。

「誰か居るのか？」

自らがいる部屋のドア一枚を隔ててややくぐもった声が、恐らく男性のものが聞こえて来た。

ここら一帯は鉄血の支配領域の筈だ。それに加えて私が居る場所に迷いなく向かって来てあまつさえ誰かいますかと聞いて来たのだ。

鉄血であらば問答無用でこちらを撃ってくるが、相手はわざわざ確認を取った。対話の意思があるのだろうか。

声から察するに男性であることから恐らく戦術人形ではない筈だ。

私の居場所を突き止めたことから高度な索敵装備を所持している可能性が高い。
少なくとも武装していると見るのが妥当だ。
「……誰かしら。ここは鉄血の支配領域よ」
だんまりを決め込もうとも考えたが、相手は私がここに居ることを知っているので無意味だと判断し、当たり障りのない返答を返す。いきなり撃ってきたりはしなかったことから話す余地はある筈だ。
「ああ、知っているとも。ついさっき襲われたばかりだからな」
声はあっけらかんと答えた。
恐らく先ほどの戦闘音は彼のものだったのだろう。
今ここで問答していることからつまり鉄血の部隊を退けるだけの力を持っていることになる。
内心警戒を引き上げ、言葉を選び更に質問を重ねる。
「……なんでこんな所に?」
「……あー、任務を遂行していたところだ。その最中に観測計器がこの建物に誰か居るって結果を弾き出してな。安全のためにこうして確認しに来たわけだ」
鉄血の支配領域での任務と聞き、思わず疑問に思うも一旦頭の隅に置いておく。どうやら安全を確保するためにここに来たらしい。それについては一応納得はした。

「君はなぜここに？」
「貴方と似たようなところね。最も鉄血の部隊に追われてこんな所に逃げ込む羽目になったけど」
「さっきの浮遊している奴らは君を追っていた追撃部隊だったのか」
「そうなるわね」
　あちらからの質問に問題がない範囲で受け答える。
　それにしてもドア越しの相手が戦った相手が鉄血の、それもハイエンドモデル部隊だったとは。
「……君は、戦術人形……でいいんだよな？」
「ええ、グリフィン＆ａｍｐ．クルーガー直属ＡＲ小隊、ＳＴＡＲ―１５。それが私の名称よ」
　言い慣れた台詞をいつもの口調で言う。
　グリフィンの広告塔としてもＡＲ小隊はグリフィン内外を問わず有名だ。隠す必要もないことなので自らの名前を明かす。
「グリフィン……。確かアンダーソンが言っていた……？」
　どうやら心当たりがあるようで、何やら考え込んでいるあちらに質問する。
「こちらの名前と所属を明かしたのだから、そちらについてもいくつか教えて欲しいの

だけど」

相手の所属を知れればある程度は情報を絞り込める。

そう考えて名前を尋ねたところ、

「……それもそうだな。所属と氏名ぐらいなら、大丈夫か。私はミリシアＳＲＳ所属、ミラン＝ホーエンハイムだ」

聞き覚えのない名称を答えられた。

これから

手に持つＭ６００スピットファイア軽機関銃を鉄血の戦術人形群に向け掃射する。Ｍ２４９とＭ６０を足して二で割った様な外見を持つこの軽機関銃は、標準弾薬に７．６２ｍｍ　ＮＡＴＯ弾を採用しており戦術人形相手にもしっかりと損害を与えれる。反動も少なく装弾数の多いコレを持って来たのは正解だった。

「ＦＳ、採掘状況は？」

軽機関銃で鉄血をなぎ払いつつ自らのタイタンに採掘の進捗を確認する。

『現在９８％、あともう少しです。パイロット、気を抜かずに行きましょう』

ＦＳからの報告に満足し接近してきた二本の単分子ナイフを装備した戦術人形を蹴り倒す。

突然の奇襲に少々驚きはしたが、敵の規模はそれほど大きくなく、戦闘能力もあまり高くないためＦＳと手分けして丁寧に処理している最中だ。

ジェットパックを吹かし、廃ビルの壁を利用しウォールランへと移行。

高所へ移動し、こちらに主砲を向ける多脚型戦車に、青白く塗装されたアークグレネードのピンを引き抜き投擲する。

投げ放たれたグレネードは寸分の狂いなく戦車に接着、命中し、電撃と共にＥＭＰ効果を発揮した。
ＥＭＰにより動きが止まった隙を見逃さず戦車の上部に取り付き、スーツのパワーアシストにより強化された身体能力で装甲板を引っぺがし、露出した機関部に軽機関銃の銃口を押し付けて引き金を引く。
銃口から放たれた無数のライフル弾が機関部に突き刺さり戦車を沈黙させた。
「大物は大体片付けたかな。……ミランの奴は大丈夫かね」
戦車の残骸の上でクーパーは一人別地点で採掘作業を行っているであろう友人に少し意識を向ける。
『彼もまたＳＲＳトップクラスのパイロットです。信じましょう』
「そうだな。心配しすぎか。さて、残りを片付けようか」
『了解です』
周囲に散乱する戦術人形と戦車の残骸を踏み越え残存勢力を排除すべく再び壁に手を添え走り出した。

ＡＲ―１５と名乗る戦術人形とドア越しに問答してから大体三十分くらい経過しただろうか。

未だに彼女は姿を見せてはくれないが。まあ、鉄血の戦術人形がそこらをうろつき周っている様な危険地帯に自らが隠れてる場所に迷いなく向かってくる奴など怪しさ満点過ぎるから当然か。

私ならば問答などせず、真っ先に撃っているかもしれない。

「貴方はどこかのＰＭＣに所属している……のよね？」

「……まあ、そんなところだ」

彼女の疑問に端的に答える。

ミリシアは元々入植者たちが結成した組織なので強ち彼女の指摘は間違っていない。厳密に言えば少し違うが訂正する必要はないのでそのまま通す。

……そろそろ採掘作業も完了している頃だろう。

接触は最低限にと言われたが、長いこと話し込んでしまったものだ。

『ＭＢ、採掘作業は？』

『はい、完了しました。回収部隊を要請したので直に帰還できるかと。ミラン、そちらはどうですか？』

ヘルメット内無線を利用してＡＲ―１５に聞かれない様に電子会話によるやりとりにより情報を共有する。

『……あまり人と話すのは得意じゃないんだ。あとは察してくれ』

『コミュ症の中学生ですか貴方は』

『やかましい』

最近ＦＳやＢＴとの情報リンクにより変なことを覚えた相棒にツッコミを入れ、彼女をどうするか思案する。

戦闘員であるパイロットの仕事ではないが、このまま彼女をここに置き去りにしてもいいものか。

本来なら助ける必要はなく、相手もまた見知らぬ誰かにほいほいついて来るとは思えない。

しかしアンダーソンが言っていたグリフィンやＡＲ小隊といった単語から察するに、彼女を助ければグリフィンと呼ばれるＰＭＣと接点を得ることができるだろう。

あとは私の良心が痛むという理由もあるが。

およそ一介のパイロットである私がどうこう決めていいものではないため、

『ＭＢ、データを纏めて転送する。アンダーソンに繋いでくれ』

『了解です。リンクを実行します』

先ほど頭の中で纏めた情報をＭＢに伝えアンダーソンに伝達する。
その後直ぐに新たな通知が届いた。